

「核なき世界」八戸からも



広島への原爆投下で被爆したピアノ。八戸市でも「核なき世界」を願う市民が、思い思いの曲を奏でる。2023年10月30日、同市のはっち

あす「被爆ピアノ」コンサート

「核なき世界」の機運を八戸からも。広島への原爆投下に耐えた「被爆ピアノ」を、一般市民が演奏するコンサートが14日、八戸市のはっちで行われる。折しも11日に全国の被爆者らでつくる日本原水爆被害者団体協議会(被団協)がノーベル平和賞に選ばれたばかり。草の根活動のコンサ

ートは、これまで全都道府県を回り、核廃絶と平和を願う旋律を奏でてきた。「被爆者の思いを感じ、平和の種をまく機会にできれば」。イベント関係者は、ノーベル賞を励みに、世界で広がる核の脅威に対し「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」の決意を訴える。(上條智洋)

「平和の種をまく機会に」

被爆ピアノは広島市の爆心地から約3キロ以内の場所で爆風や熱線、放射能などの被害を受けたピアノ。被爆2世の調律師矢川光則さん(72)が八戸市で演奏可能な状態に修復し、2001年から全国巡演コンサートを行っている。

「ピアノは直せば音で記憶や平和への思いを伝えられる。被爆ピアノの演奏を聴くことが、平和について考えるきっかけになれば」。矢川さんは活動を継続する意義についてこう語る。

これまでに47都道府県全てで計3千回以上、コンサートを実施。17年にノルウェーで開かれたノーベル平和賞記念コンサートなど、海外にもピアノを運んで、核廃絶の思いを世界に発信してきた。

被爆者自らがつらい体験を語り、「核なき世界」を地道に訴え続けてきた被団協がノーベル平和賞に決まった。矢川さんは「ウクライナ情勢などを見ると、世界では今、核戦争の可能性がささやかれている。このタイミングで受賞したのは大きな意味

がある」と力を込める。今回、八戸でのコンサートは、ノーベル賞決定直後だけに、非核・反戦の高まりにも期待。「戦争をするのは人間だが、食い止めるのも人間。演奏を聴いた人が、平和は与えられるものではなく、一人一人がつくり出すものだ」ということに気付いてほしい」と願う。

八戸コンサートは、19年から八戸学院短期大学部幼児保育学科が企画し、コロナ禍の21年

を除き、毎年開催している。同学科の中嶋栄子准教授は「大人はもちろんだが、戦争を知らない子どもたちに、音楽を通じて平和とは何かを考えてもらいたい」と強調。ノーベル賞を追い風に、市民レベルで「核なき世界」の機運が高まることを期待する。今回は、公募で集まった園児から86歳までの市民33組が演奏を披露する予定。コンサートは入場無料。時間は午後0時半〜同4時ごろ。